

# 戦時下賀川豊彦の思想と行動

小南浩一

- 一、はじめに
- 二、一九三〇年代の平和論
  - 一節 中国に対する謝罪
  - 二節 三〇年代の平和論
  - 三節 協同組合的世界経済同盟による平和構想
- 三、太平洋戦争下の言動
  - 一節 賀川「転向」説について
  - 二節 「武張る文章」 （「戦争支持」の言説）
  - 三節 「柔らかい文章」 （「いと小さき者」への奉仕）
- 四、「戦争支持」への「転回」の論理
- 五、三〇年代の言説と戦後の言説を繋ぐもの
- 六、おわりに

## 一、はじめに

戦時下における賀川豊彦の思想と行動については、夥しい賀川研究のなかでも最も手薄な分野である。一九八八年の賀川生誕百年における様々な企画のなかで打ち出されたのが「賀川評価の科学化」であつた。これを契機に賀川の優生思想、天皇観やアジア民衆観、及び戦争責任問題など、戦時下の賀川を理解するうえで重要な研究が蓄積されつつある。しかし、戦時下の賀川の言動を実証的にあつづけ、賀川思想全体の中で位置づける作業は、いまだ不十分と言わなければならない。戦時中のナショナリスティックな言動をもとに、日本国内における「反動者」「転向者」としての賀川評価は、欧米で定着しているレアリスティックパシフィストとしての賀川評価と大きなズレがあると言えよう。<sup>(3)</sup>

本稿の目的は、賀川の個人雑誌「雲の柱」(一九三二年一月〜四〇年一〇月)と、同じく賀川の主宰する(イエスの友会)の機関誌「火の柱」(一九二四年六月〜四四年五月)を中心に、賀川研究の「空白」部分ともいうべき、いわゆる十五年戦争下における賀川の思想と行動を分析することである。分析の視角は以下の三点である。

- ① 一九三〇年代の賀川の平和論及び平和構想がいかなるものであつたかを検討する。
- ② 一九四〇年代、特に太平洋戦争下における賀川の言動を分析する。
- ③ 三〇年代の平和主義から四〇年代の「戦争支持」にいたる「転回」の論理を明らかにし、従来の賀川「転回」説を再検討する。

さて、賀川は何よりキリスト教の伝道者であり、貧しい人々に対する具体的、実践的な援助者であつて、もとより思想家ではない。この賀川の全体像のなから内在的に賀川を理解するためには、賀川自身によるイエス・キリスト理解の方法を援用しなければならない。即ち、イエス・キリストの宗教を真に理解するためには、イエスの発

表した言論と行動を徹底的に調べるだけでは不十分として、「言論とか行動とか言つても、それはまだイエスの秘密にまで到達したものとは言はれない。イエスの秘密はその内部生活、言ひ換へればイエスの意識生活のうちにある」という。鵜沢裕子は、賀川の「作品の中に普遍性や論理性を目ざした思想を探ろうとするのではなく、その内的世界にあたう限り寄り添う仕方、賀川が、自らの根源的な体験に根ざす信の世界をいかにかして言語化し伝達しようとした渾身の努力のあとを検証することとおして、その真相を共感的に読みとること」の重要性を指摘している。戦時下、賀川が絶対的な平和主義者であったか否かという絶対的基準で断罪するのではなく、<sup>(6)</sup> 先述の賀川自身によるイエス理解の方法、あるいは鵜沢の視点に立つて、賀川の内在的理解にせまりたい。

## 二、一九三〇年代の平和論<sup>(7)</sup>

### 一節 中国に対する謝罪

一九三一年九月、満州事変勃発の時、賀川はアメリカで講演活動をしていた。講演で日本の江戸時代二五〇年の平和を説き、「日本は戦争を愛する軍国主義者ではない」と強調したが、「さういふ演説の直後、満州問題の号外を手にかけてがつかりした」<sup>(8)</sup> という。帰国の太平洋上で賀川は次のような詩を書いたという。

悩みの子

また悩みの子に私はなつた　日本の罪を負ひ　支那に詫び　世界にわび　小さき靈を　ちちに砕く悩みの子と  
私はなつた

何故か？

何故かこぼるるよ 私の涙 民は食なくて飢えつつあるに 戦をかまへて民を苦しめる 心なき軍閥の態度 あ  
あ うしろの山に柴かりつつ 世界の平和を祈りつつある やさしき魂のあるを 彼等軍閥は知るか 否か？

満州事変直後、賀川の同志高橋元一郎は軍縮・日華親善・国際連盟支持を柱とするクリスチャン平和連盟の私案を発表している。委員長に賀川、副委員長に杉山元治郎、小崎道雄、久布白落実、顧問には尾崎行雄、新渡戸稲造、田川大吉郎、安部磯雄、吉野作造の名が挙げられ、機関紙「平和のタネ」が創刊された。翌年三月には「賀川先生や帆足先生、林歌子さん、市川房枝さん、高良富子さんたちを動かして犬養首相に平和請願書を提出」している。<sup>(10)</sup>

世論が満州国建国の祝賀ムード一色になっている三二年一〇月、ひとり賀川は「勝利の悲哀」と題して「言いしれぬ憂愁が私の胸の底を流れる」と書いた。柳条湖事件以来の短時日における「剣による勝利は、人の魂を征服しない。愛による勝利が、永遠の平和を保証」し、こうした関東軍による満州支配は「今迄持つてゐた日本の世界に誇るべき榮譽」を傷つけると批判する。そして「日本の更生と勝利を超越した永遠の道が日本にも再び湧き溢れるやうに祈らざるを得ない」と結んでいる。<sup>(11)</sup> かつて徳富蘆花が、日露戦争の勝利を日本の破局と予兆したやうに、賀川もまた、満州事変後の日本の行く末に「暗雲」を予感したのであろうか。<sup>(12)</sup>

一九三四年二月八日、フィリピン伝道るとき、ルソン海上で賀川は次のような一文を記した。

……

私は日本を愛しているのと同じやうに、中国を愛しています。さらに、私は中国に平和の日が早く来るやうに祈り続けてきました。日本軍のあちこちでのいやがらせで、私は異常なほどに恥じました。ところが、中国の方々は日本がどんなに凶暴だったかにもかかわらず、私の本を翻訳してくれました。私は中国の寛容さに驚かずにはいられませんでした。例えば私が日本の替わりに百万回謝罪しても、日本の罪を謝りきれないでしょう。……

私は無力すぎます。私は恥じます。私は日本軍閥を感化することができませんでした。中国の読者の方、私を無力者と思つて、私を侮辱してもかまいません。それは私が受けるべきことです。

しかし、もし日本が悔い改めて中国と永久的な友好関係を結ぼうと思つたら、それは愛の法則を借りるほか道がないのです。（中略）

孔子や墨子を生み出した国民の皆様よ、お許しください。

日本民族は鉄砲を棄て、十字架の愛の上で目覚める日は、きっといつか来るでしょう。

現在私は謝罪することしかほかに何にも考えられません。もし中国の方々がこの本をめぐつて読んでくれたら、日本にも多くの青年の魂が、私と同じように悔やみ改めながら本気で謝罪を申しているということを忘れないでください。<sup>(14)</sup>

これは賀川著『愛の科学』の中国語版（三四年六月刊行）のために書き下ろされた「著者新序」の一語であり、この一語がどれだけ中国のキリスト者に良い感じを与えたか知れないと言われている。<sup>(14)</sup> このフィリピン伝道の帰途、上海の鴻徳堂で賀川は特別礼拝に招かれている。二年前の第一次上海事変のとき、この鴻徳堂の信徒と牧師は全員、日本軍によつて虐殺された。鴻徳堂の謝牧師はこの憎しみの感情を乗り越えるべく、賀川に礼拝説教を要請し、賀川がこれに応じたのであった。当日、鴻徳堂は四百名、礼拝堂の階下は満席であつたという。賀川は、しばしの沈黙後、突然泣きながら「JESUS, said『Father, forgive them; for they know not what they do!』」とつぶやき「私は今朝、説教しに来たものではありません。お詫びに来たのです」といった。「ほんの数分間の説教であつたが、終わった瞬間会衆は席を立てて全員説教壇に押し寄せ、互に無言のまま、先生に握手を求めた」という。<sup>(15)</sup> こうした賀川の動向を海外のメディアは「Dr... is a beautiful Christian（略）is an ardent peace worker...」と<sup>(15)</sup>

報じた。

また、一九三七年七月、盧溝橋事件による日中戦争勃発の直後、賀川は「涙に告ぐ」と題する詩を書いている。

涙よ 涙よ 幼き日よりの 親しき涙よ しばらく別れていた 涙よ またお前と 同居する時が来たね。真夜中に 夜明けに 真昼に 午後にお前はしばしば私を訪ねて来るよね。

お前は私の兄弟「支那」の悲しいニュースを伝えては 私を罵つて帰つて行くね。私はお前の罵りをいくらでも受ける 私は卑怯者ではない。ただ私は日本を愛し 支那を愛している この二人の 愛するものに喧嘩をさせたくない そのために 私は毎日苦しんでいるのだ。

私は失神者のようなまた幽霊のような存在をつづけている 人の罪を背負つて 十字架にかかったイエスのように 私は国の罪を負わねばならず 背負いきれない国の罪に 私の頸はしずみ 頭はうなだれる。

涙よ 涙よ しばらく別れていた涙よ また お前と同居する日が来たね

一九三七年九月<sup>1)</sup>

涙の詩は、『涙の二等分』以来のいわば賀川の原点でもあった。後述するように、詩は賀川にとって、内なるもの、より本源的なものの表出にかかわる表現形態であった。

さて、こうした賀川の謝罪は中国の要人に多大な影響を与え、とりわけ蔣介石夫人宋美齡をして「日本に賀川が居る限り、日本人を憎むことはできぬ」と言わしめたという。この詩はアメリカはもとより、フランス語にも訳され、「軍国日本の良心の声」として欧米に伝えられたという。<sup>2)</sup> 盧溝橋事件のあとの一〇月の日記に、賀川は「いよいよ日本も孤立することになった。その孤立がよいか悪いか別として、日本は自分の運命を自ら批判し、世界の文明

に貢献する準備をしなければならない。我ま、だけを通して、人類に貢献しないのでは、東洋の君主国の名にそむく」、「我々は飽くまで覇道を歩まないで、仁を基とする王道を、孔子の曰つた如く歩むべきだ」と記し、軍部の戦線拡大を批判した。<sup>(19)</sup>

続く三十七年一月から翌三十八年一月にかけての南京大虐殺に対する賀川の直接の言及はないが、一月一二日松沢教会で欧州帰りのヘレン・タッピングの報告によって、賀川はこの虐殺を知ったと思われる。三十八年一月の賀川の日記に「上海の飢民が毎日数百名死んで行くといふことを聞いて身慄してゐる、早速某方面を説いて、被服やコンデンス・ミルクを送る用意をしてゐる」とある。<sup>(20)</sup>

## 二節 三〇年代の平和論

さて、三〇年代の賀川の平和論<sup>(21)</sup>については二つに大別される。一つは第一次世界大戦という未曾有の経験のうえに立って、宗教者・伝道者として神による平和、戦争や殺戮の愚かさ、軍縮や平和教育の必要性を説いた点である。二つは、しかし同時に当然のことながら、哲学的、道徳的に戦争の罪悪性や非道徳性を説くだけでは戦争を防止することは出来ないとし、科学的戦争防止策、即ち具体的実践的な平和工作を提示した点である。さらに、これらの平和論はいずれも日本国内にとどまらず、世界的なスケールで説かれ実践された。一九二五年、欧州旅行中のロンドンで、賀川はタゴール、ガンジー、アインシュタイン、ロマンロランらと共に「徴兵制度廃止の誓い」に署名して、それを国際連盟に提出したことはよく知られている。また、後述するWRI（国際戦争反対者同盟）への入会、小崎道雄らFOR（友和会）の面々との連携や、オックスフォード・グループ運動との関係など、賀川の平和運動は世界的なネットワークのなかで展開された。<sup>(22)</sup>

さて、二つの平和論の前者から見ていこう。賀川は宇宙全体意識、神の意識から人間の殺戮行為の不毛性を説い

ている。曰く「敵をも赦し、悪人をも救はんとする宇宙全体意識を持つ、贖罪愛のみによつて、他民族を愛し、悪人を救ひ、世界平和の理想を実現することが出来る」<sup>(26)</sup>。また、賀川は「文明と称する殺人的軍備競争」は「諸民族の自殺」であり、その「軍備費を産業と教育と、発明と発見に向けるがよい」<sup>(27)</sup>と強く軍縮を主張した。と同時に、軍縮を可能たらしめる平和教育の重要性についても主唱した。三四年、ロンドンで行われた新海軍軍縮条約の予備会談に注目した賀川は、岡田首相の軍縮案を支持する一方、日本国内の軍国主義の台頭に毅然と対処しない二枚舌を批判した。即ち「世界の主力艦隊、航空艦隊をやめようというのはよいが、日本の小学生にも国民にもその平和教育をしなければならぬ。世界に向かつてだけ非戦主義を見せかけ、国内では大いに軍国主義を鼓吹するやうでは賛成出来ない」<sup>(28)</sup>。「平和教育」という言葉は当時あまり使われていなかったが、幅広い社会運動においてその教育的機能を重視し、かつ実践してきた賀川にしてみればむしろ当然のことであつた。曰く「真実に軍縮を要求するならば、平和教育をも盛んにする必要がないだろうか。…列国に軍縮を徹底さす前に我々は日本にまず平和教育を興す必要がある」<sup>(29)</sup>。では、平和教育の具体的内容とは何か。「平和に関する思想の発達史、平和に関する哲学の発達、動物の社会生活、動物間に於ける母性愛の発達、世界に於ける食物問題の根本的解決法」<sup>(30)</sup>等々を挙げている。

また、賀川は「二等国主義」と題して「私は、軍備の一等国を少しも感心しない。欧州に於る平和な国は、むしろ小国にある。彼等は軍備を最小限にして、教育第一主義に即してゐる」<sup>(31)</sup>とし、具体例としてデンマークを挙げている。豊富な海外体験を持つ賀川は欧米の実状に通じていた。立体農業、協同組合、教育立国などの観点から、賀川がよく挙げるのがデンマークであり、ノルウェー、スウェーデンといった北欧の小国である。彼は軍備大国、覇権国家を批判し、道義大国、王道国家を高唱した。こうした二等国主義は明治維新以来の近代日本の針路に関して、特に日清戦争以後潰えた、中江兆民、田口卯吉、谷干城らの小国主義の系譜に連なるものではなからうか。

このように軍備の一等国・大国ではなく、道義大国をこそ我が日本は目指すべきだと賀川は主張した。「偏狭なる



「日本精神」を排し、「世界を日本のために」ではなく「日本は世界のために存在してこそ世界の日本たることが出来る」ことを自覚し、「世界を抱擁し、万民相愛の世界を樹立してこそ、大和民族の使命があり、「領土欲を離れ権力欲を離脱して世界精神に生きてこそ、神が日本民族を選んだ使命がある」と賀川は主張した。このように世界に貢献、奉仕することこそ日本の責務であり、使命であると宗教者としての見解を示した。このような「世界精神」を賀川は「宇宙精神」とも言い、日本だけに通用する独善的論理を棄てて、「謙虚になつて宇宙の真理に聴かねばならぬ」と言っている。また、賀川は「宇宙的日本を作るか、日本的宇宙を作るか、日本は今やこの迷路に立つてゐる」、「日本の新聞も雑誌も、日本的宇宙を作ることと急であつて宇宙的日本を忘れてゐるかの観がある」として、独善的ナショナリズムを厳しく批判している。この「宇宙的日本」とは普遍的な世界の価値を日本も認め、さらにそれに積極的に寄与し、世界に貢献することが日本の使命であるという上述の文章と同じ主張である。こうした言説は「世界に仕えるために献げられた国」<sup>35)</sup>日本の使命を強調した内村鑑三に通じるものがある。<sup>36)</sup>

### 三節 協同組合的世界経済同盟による平和構想

ここでは、三〇年代の賀川平和論のもう一つの側面、即ち具体的実践的平和構想について検討したい。

一九三五年四月、メルボルンでなされた賀川の講演は、彼の具体的実践的平和構想を知る上で重要な位置を占める。世界恐慌を契機として、この時期、世界が国際主義・協調主義から国家主義に転じている状況に危機感を感じていた賀川は、国際連盟の改革による協調的な貿易システムの構築によつて、それを回避することが世界平和の確立に寄与すると確信していた。この講演で賀川は、「国際連盟は単に政治問題にしか関心を持たず、「国際間の経済運営には全く関与しない」ので、「近い将来、連盟に（経済問題に対する）何等かの積極的な機能を与えない限り、連盟はその力を失うだろう」と語っている。賀川は「協同組合による貿易方法」で成功しているデンマークと英国

の例をあげ、このような「国際貿易の協力的な提携」が、さらに「広範に運用できないだろうか」と提案する。そして、イギリスのロッチデール方式やドイツのライプアイゼン方式による協同組合原則を国際貿易に適用することを提案する。さらに、国際連盟に於ける万国労働會議に代表団を派遣するように、国際貿易會議を立ち上げ、そこに代表団を送り、全世界の代表が経済協力について討議することが出来れば、それは「国際平和を達成するための偉大な成果となるだろう」と主張している<sup>(17)</sup>。

第一次大戦以降、一九二〇年代から三〇年にかけてのデモクラシー運動の高揚期、賀川は政治上のデモクラシーのみならず、経済上のデモクラシーの重要性を説いた数少ないデモクラットの一人であると私は論じたことがある<sup>(18)</sup>。この政治的平等と同時に経済的平等を主張する賀川の姿勢は、世界における経済問題にも貫かれた。第二の世界戦争が起こるとすれば、かつての十字軍に見られるような宗教的対立、また人種の偏見による対立からではなく、それは経済的問題からと賀川は考えた。国際連盟がそうした国際経済問題を解決する機能をもたないことは致命的であつた。国際連盟の改革を強く主張する所以である。特に一九三三年の世界經濟會議の失敗は、賀川をして上述の通り、連盟内に世界經濟連盟を組織して世界的な協調貿易体制を構築すべき<sup>(19)</sup>との思いをますます強くさせたのであつた。

この時期、国内はもとより、世界的にも協同組合運動の第一人者と目されていた賀川は、「一九三一年以後（満州問題以後）——世界に向かつて世界の平和は協同組合を基礎にすべし<sup>(20)</sup>」と主張してきた。その協同組合主義による世界平和構想がまとまるのが、先述のメルボルン演説をはさむ一九三四年から三七年にかけての時期である。その間、『雲の柱』誌上だけでも、「組合國家を論じ國家改造に及ぶ」（三四年八月九月）、「協同組合國家論」（三五年四月）、「協同組合運動の指導テーゼ」（同年四月五月）、「世界平和の經濟的工作」（同年一〇月）、「キリスト教兄弟愛と經濟改造」（三六年三月六月）、「世界平和の協同組合的工作」（三七年一月）に及んでいる。

また、この時期、三五年、三六年の渡米講演はアメリカにおける協同組合運動の発展を図るものであったが、先の「キリスト教兄弟愛と経済改造」はその講演原稿であった。これは「プラザー・フット・エコノミー」として出版され、恐慌後の打ちひしがれたアメリカ人を勇気づけると同時に、あまりにも競争的・個人主義的なアメリカ社会に対して「友愛」精神の重要性を喚起するものであった。先の具体的実践的な平和構想と並んで、ここではそれを可能とする、精神の問題に重点が注がれた。

一九二五年、レザマンドリエでの国際連盟事務次長新渡戸稲造との出会い以降、新渡戸の国際協調主義を受け継ぎ、国際連盟の改造を企図した賀川流の協同組合主義による世界平和構想がここに展開されたのである。<sup>11</sup>

協同組合的世界経済同盟構想の集大成とも言うべき、『雲の柱』三七年二月月号の「世界平和の協同組合的工作」をもとに、その具体的構想を概観しよう。まず、前提となる三つの原則が①協同互恵の精神、②権利及び機会の均等、そして③搾取主義の排除（利益の払い戻し）である。これらはいずれもロッヂデール式協同組合原則に他ならない。つぎに三種類の世界経済会議が順序立てて開催される必要があるとし、まず、船舶やガソリン、産金などの特殊な品目ごとの品目別国際経済会議、次いで地帯別経済会議（これは、一国対一国から数力国単位、或いはアジア・太平洋地帯などのブロック単位まで、様々な組み合わせが可能である）、そしてこれら品目別・地帯別経済会議の結論を持ち寄って、それらを地球的規模で総合調整する世界総合経済会議が想定される。具体的には、品目別国際経済会議を一「生命」維持に関する経済会議、二「力」に関する経済会議、三「市場」、四金融等々七つの分科会に分ける。そして、例えば「生命」維持に関する経済会議はさらに①人口問題、②土地問題、③日用必需品問題というようにテーマごとにそれぞれ特別委員会が作られ、①の人口問題では移民問題や異人種の衝突融合について研究し、各民族間の協調を図るとしている。また、③の日用必需品特別委員会では、さらに食糧、被服、建築材料、薬品、衛生材料といった五つの専門委員会が設定され、物資の移動、規格標準の設定などを子細に検討し、各国の

需給問題を調査し、各国民族が安心して生産かつ消費しうるよう努力するとされている。二の「力」に関する経済会議は労力・動力・機械力・化学的エネルギーに関するもの・一般生産力に関するものの五種の特別委員会からなる。労力とは労働力・労働者問題であり、これについては現に国際連盟の中に国際労働会議があつて、これを地帯的に整備し、それらを総合してより効果的なものにする。また、化学的エネルギー委員会は、石油、石炭等の動力資源が、搾取を離れ互助友愛の精神で有効利用されるよう研究するとしている。四の金融経済会議では為替、クレジット、通貨（特に金本位制）問題を扱う。各国の拠出金による国際銀行制度を設け、世界の通貨制度を統一し、為替の煩雑から来る投機的混乱を避けるべきだとしている。なお、金本位制については、賀川は必ずしも必要ではないとし、それよりも為替システムこそ重要であるとの認識を示していた。実際、三五年当時、三四ヶ国以上がすでに金本位制から離脱していたがそれでも不都合はないと賀川は言う。こうした賀川の経済政策的議論については、もとよりその不十分さが指摘されている。<sup>④</sup>しかし、賀川の協同組合思想は資本主義の更改であり、個人・国家レベルの競争本能による「本能経済」ではなく、そこにキリスト教的兄弟愛、贖罪愛を注入する「意識経済」の構築であった。換言すれば、経済における倫理的側面の強化（そのためのシステムの変換と人心の更改のこの両者が不可欠であると賀川は主張）であるが、<sup>⑤</sup>ここではこれ以上立ち入らない。

### 三、太平洋戦争下の言動

#### 一節 賀川「転向」説について

第一次世界大戦前後から一九三〇年代、平和主義を標榜し、具体的実践的な平和構想を掲げてきた賀川の言動については第二章で見たとおりである。その賀川が一九四〇年代、特に日米開戦以降はその平和主義を捨て去り、「熱烈なる」太平洋戦争支持者に「転向」したというのが、先行研究のほぼ「定説」といえよう。ここでは、これら

「定説」の論拠を検討した後に、賀川の真意を探るとしよう。

鶴見俊輔によれば、一九四三年一月、「東京憲兵隊本部で取り調べを受けた賀川豊彦は、「無言賦」という詩を書いて沈黙のうちに平和思想を守る決心をのべたが、それから十日たたぬうちに国際戦争反対者同盟ジョージ・ランズベリーにあてた公の手紙を発表して、アジア植民地解放のために日本の戦争目的を支持する、と述べて転向した」。

佐治孝典は、一九四〇年八月の憲兵隊拘留後の言動を第一の転向とよび、一九四三年一月の場合（ジョージ・ランズベリーにあてた国際戦争反対者同盟脱退の手紙）を第二の転向とし、後者が賀川の決定的な転向であったと言<sup>(6)</sup>う。

鶴見・佐治の両者が賀川「転向」の根拠に挙げるジョージ・ランズベリー宛の国際戦争反対者同盟脱退の手紙が初めて公開されたのは、一九五九年刊行の安藤肇『深き淵よりキリスト教の戦争体験』においてであった。以来、多くの論者が賀川「転向」の一番の根拠として必ず引用する資料である。内容の一部を紹介すると

世界平和の為に卿等と共に戦ひし私は、此処に英国にある兄弟達と訣別し新しき道を選ぶことを決心し、国際戦争反対者同盟を脱退することを茲に表明する。（中略）

然し、今や日本人としての私は敵国にある戦争反対者同盟の一員として名を連ねることを恥ぢ（ママ）ねばならぬことになった。：

思ふに米国は日本人に対して差別待遇を過重し、日本移民の北米移住を厳禁し、その土地所有権を禁止し、小学校より日本児童を追放し、通商条約を破棄し、遂にはA B C D包囲圈を以つて、日本を脅迫し、遂には、資産凍結令を以つて、日本の経済を死滅に導くことを敢てした。その瞬間、私は永年持つて居た平和論を太平洋上に

捨てざるを得なくなつた。：

そして、今日に於ても真の意味に於いて東洋に於ける独立国家は日本だけである。その日本をチャチル（ママ）とルズベルト（ママ）が撃砕しようとしてゐる計画を見ては、いくら忠実な平和論者でもその主義に忠実なることは許されない。私は日本人の凡てが殺戮され、私唯一人になつても、東洋の独立と自由を日本を通じて守り通さねばならぬ決意を堅くしたのである。（中略）

私は平和を愛好する。然し私は奴隸解放の為には、アブラハム・リンコルンの手段をも是認するものである。此意味に於て、私はルーズベルト及びチャチル（ママ）によつて強られた此度の戦争は日本を奴隸化し、印度及び、支那は勿論、ビルマ、タイ、フ井リツピン（ママ）其他全アジアを永久に奴隸化する征服運動であると思ふが故に、私は敢然として、アブラハム・リンコルンの手段を選ぶものである。<sup>(46)</sup>

確かに賀川は「永年持つて居た平和論を太平洋上に捨てざるを得なくなつた」、「いくら忠実な平和論者でもその主義に忠実なることは許されない」としてその平和主義を捨てた。しかし、賀川が宛てた当の相手ジョージ・ランズベリーは、米沢が指摘するようにこのときすでに亡くなつていた。手紙の日付は四三年一月三〇日、彼の死は四〇年五月七日である。ランズベリーの死を賀川が知らなかつたとは考えにくい。上述の三五年四月のオーストラリア講演でも賀川は、ランズベリーとのやり取りについて詳しく話していたからである。死者への手紙は一体何を意味するのか。米沢は手紙が書かれたとされる四三年一月三〇日の前に行われた賀川への取り調べ（同年五月二七日神戸相生橋署と、同年一月三日東京憲兵隊本部での）との関係から、また、「残された原稿の書き直した跡や、乱雑な筆跡」から、「書かされた」可能性を指摘している。<sup>(47)</sup> 手紙の内容は、後述するような四〇年代の賀川の記事に通じるものがあり、賀川の筆によるものであることは間違いない。ただ、資料としての「手紙」そのものの批判的

視点なしに、これを賀川「転向」の決定的論拠とするのはいかなものか。

もう一つの賀川「転向」説の有力な論拠は、聖書にあるロマ書九章の一節「もし、わが兄弟、わが骨肉のためならんには、我みずから詛われてキリストにすてらるるも、亦、ねがうところなり」である。これは『賀川豊彦伝』の著者横山春一が、戦後の一九五二年頃、戦争中の気持ちを知りたいと尋ねたところ、賀川が書棚から聖書を取り出して示した箇所であった。<sup>(8)</sup>

しかし、この一節はすでに戦時中の『火の柱』一六九号、四三年一〇月刊に「国難に殉ずるもの」と題して掲載されている。先のジョージ・ランズベリー宛の手紙の直前に書かれており、内容的にも以下に示すとおり、類似している。

『わが兄弟、わが骨肉の為ならんには、たとひ詛はれてキリストに棄てらるゝとも、わが願ふところなり』……君国の為には、たとひキリストに棄てられても国に殉ずる覚悟がなければならぬ。……国に殉ずる心根こそキリスト精神そのものである。……苦難は新しき栄光である。死は勝利の緒であり、十字架は誇の冠そのものである。……『来れ、来れ、苦しみ、憂き悩みも厭はず勇み歌はん、国を愛する愛をば、愛をば……』死ぬべき時は今だ！君国の為に殉じてこそ十字架精神を始めて高揚出来るのだ！血を以て真理を守ることが教へたキリストはアジア解放の為に血を流すことを祝福しないではおかぬ。非法を以つて、真理をおおひ暴虐を以つて弱小民族を強奪するチャアチルや、ルーズベルトをして絶対に勝利を得しめてはならない。……血の最後の一滴までをも皇国に捧げよ！その血を捧ぐる時は今だ！真理を防衛せんとするものはその血を惜むな！十字架にのみ勝利はある。キリストの弟子は十字架を負いて皇国に殉ぜよ！

「皇国に殉ぜよ！」と説く、こうしたナショナリスティックな言辭を見れば、賀川「転向」説はますます揺るぎないもののようにも思われる。しかし、私は思想的な変節という本来の意味での「転向」は、賀川にはなかったと考える。以下、その根拠を明らかにする。

## 二節 「武張る文章」(「戦争支持」の言説)

一九四〇年代、特に「昭和一六年一二月八日、その一日で世界の歴史は変わってしまった」<sup>(4)</sup>と賀川の言う対米英戦争勃発以降の言動について、ここでは『火の柱』を中心に検討する。『雲の柱』が一九四〇年一〇月、賀川の反戦容疑と共に終刊した後も、『火の柱』は一九四四年五月一〇日まで発刊されているからである。なお、管見の限り、この『火の柱』を使って太平洋戦争下の賀川を思想を論じたものはない<sup>(5)</sup>。もともと、戦時中に発刊が許されたこと自体、その内容が当局の認める戦意高揚、国威発揚をはかるものであったことは当然と言えば当然であった。

さて、一九二〇、三〇年代には、イエスキリストの「愛」を高唱し、「生命」の宗教としてのキリスト教を説いていた賀川が、四〇年代以降、「死」の宗教、死を賭し、鞭を持つて戦い抜くキリストを全面に掲げるようになる。死を説くイエスについて賀川は次のように言う。

イエスにとつて、死ぬことは一つの意味を持つてゐた。彼は生命の中に死なねばならぬ必要性を考へてゐた。我々はさうではない。死を不可抗力としていやいや受ける。然し、一粒の麦落ちて死なずば云々の言葉にある如く、キリストは死を一つの投資と考へて居られた。

第二に、キリストにとつて死は贖罪愛の代償であつた。死を通して、なければ罪惡を救ひ得ぬと云ふ内容を持つて居た。我々にとつては死は一つの偶然にすぎぬ。怪我、病氣等による偶然である。しかるにキリストは初め



より死に対するプログラムを決定してその通りに死なれたのである。…このキリストの死の意義をよく考へて、我々もかうした心を以て、死ぬことが出来るか否かを反省せねばならぬ。幾十万の同志同胞が戦線に戦死してゐる現在、国内に残つて居る我々も死を目的として生活してゐるかどうかを考へなくてはならぬ。…イエスの死んで下さつた殉教の血をうけつぐ者出でよ。命を棄てゝ国を守るのは、戦線に於いてのみではない。国内に於いても大いに要求されてゐるのである。従つて十字架の血をつぐ者は生命を抛つことを恐れてはならない。<sup>(34)</sup>

このように「キリストの死の意義」を強調して、非常時に対する殉国の精神を説いた賀川は、さらに死を賭け敢然と艱難に立ち向かう、勇ましく強いイエス像を語つた。

イエス・キリストの戦闘的精神がどこから生まれて来たかを学ぶ必要がある…イエスは…我は平和を目的として居ない、地上に神の火を投げん為めに来たのだ、真理に背く者に戦を挑むのだと云つて居る…イエスが自分の為めにではなく、全人類の為め、全生涯を賭けて、神の戦をたゝかつた如く、我々も、このイエスに従ひ、殉国の精神をもつて聖戦の目的完遂のためにこの一年を突破したい…かくして日本を守り、東亜を解放し、世界の歴史を書きかへる為めに、死を賭しても戦ひ抜く敢闘的精神を与へ給へ…<sup>(35)</sup>

そして、さらに賀川「転向」論者がしばしば引用する一文がある。四三年一月一〇日の「天空と黒土を縫合せて」と題する詩である。序文に曰く、

ルーズベルトの国民のみが、自由を持ち、アジアの民族のみが奴隷にならねばならぬと云ふ不思議なる論理に、

太陽も嗤ふ。…ルーズベルトの独善主義に、迷惑してゐる。…『大君のへにこそ死なめ省みはせじ』と私心を忘れ、生死を超越し、たゞ皇国にのみ仕へんとするその赤心に、…嗚呼 アジアは目覚めた！印度は解放を叫び、中華民國は米英に向かつて呪の声を挙げた！

明らかに平和主義・国際協調主義から、太平洋戦争「支持」への「転回」である。米英の独善主義、帝国主義に対するアジア解放の論理は、先のランズベリーへ宛てたあの脱退声明と同じ趣旨である。

同年九月には関東大震災記念祈禱会で「腰ひき繁けて丈夫の如くせよ」と題する説教をし、震災復興と戦争への激励を説くのであった。曰く

「チャーチル、ルーズベルトの大軍が、艦を連ねて攻め寄せる事があつても、一騎当千の勇士は後に向く事はない。苛烈を加ふる戦闘は亜細亜を奴隷にするか、解放を約束するかの分岐点に立つ。元寇百万の大軍も、元寇の神風に一たまりもなく敗退した。…亜細亜の開放を歴史的回転の必然性とみる我々に取つては、全能者は我々の進路を阻み給はざる事を知つてゐる。…(アメリカによる)ハワイの領有も、フィリッピンの征服も決して正義の歴史ではなかつた。亜細亜の国々に光明を与へないで、アングロサクソンのみが世界の独裁官であり得ようとするそんな誤れる宗教思想に亜細亜の何人が賛同し得るか、亜細亜に於ける基督運動の最大の敵はルーズベルトでありチャーチルである。…亜細亜の解放は一に我等の双肩にかゝつてゐる。…我々は戦場に倒れてもアメリカの奴隷になりたくない。…亜細亜の眠りは余りに深かつた。(スペイン、ポルトガル侵攻以来四百年の侵略の歴史を述べている)…ルーズベルトはこの恐るべき四百年の歴史を忘れて、強いられた戦争とはよくも云えたものだ。若し日本が倒れるならば亜細亜全部が失はれるのだ。…空爆が何だ。空の要塞が何だ、死を賭して戦

ふ者に何の恐怖があらうぞ、我は垂細亜の自由の為に死を賭して国を守るのだ。…垂細亜の為に死ぬ事が我々に要求せられてゐる」<sup>(34)</sup>

まさに「転向」論者のいう「反動者」、「民衆を戦線に駆り立ててゆく煽動者」<sup>(35)</sup>としての賀川と断ずるに不都合はないようにも思われる。さらに、四四年一〇月の「米国滅亡の予言」と題するラジオ放送では、

禍なる哉アメリカ！「白く塗りたる墓の如し」と云ふ言葉はアメリカの為に造られた言葉だ！口に平等を唱へて、他民族を圧迫し、言葉に自由を弄して、自己のみの優越性を維持せんとするその放縦性を全能者は許し給はないであらう。

反省せよアメリカ！キリストの名は余りにも彼等の砲弾によつて穢され、アジアの諸民族はアメリカの為に躓く！…

あゝ禍なる哉アメリカ！世界の文明は単一なるアングロ・サクソンの文化にのみよつて組立て得る迷妄を捨てよ！…<sup>(36)</sup>

こうしたアメリカの独善主義、独断的正義及びアメリカ文明の押しつけに対する賀川の批判の論理は、二〇〇一年九月一日のアメリカ同時多発テロと、それに対するアメリカのアフガン空爆による報復を見た我々にとって、その報復に対する批判の論理と不思議に一致していることに驚くのである。そして、それはあのベトナム戦争におけるアメリカによる「北爆」批判の論理とも。

以上、太平洋戦争下における一連の「武張る文章」を見てくれば、賀川がこの戦争をアジア解放の聖戦とみて、

日本の戦争政策を断固「支持」するものであり、賀川「転向」論の論拠はますます補強されたやに思われるが、果たしてそうであろうか。

### 三節 「柔らかな文章」「いと小さき者」への奉仕

前節で見たような、こうした戦争讃美の、死を賭す覚悟を説く勇ましく厳しい文章の一方で、それとは対照的に一息つくような柔らかな一文が散見される。そしてそれらは散文詩の形で表現される場合が多い。

四三年二月六日付けの「無執着」と題する散文詩で賀川は次のように語っている。

私は悪いことをした覚えはないが、キリストに就く故に世に疎んじられ、馬鹿者扱ひされる。然し、名譽にも地位にも富にも無執着でいられる私は漂々（ママ）として、書物の頁と頁の間に隠れる。…私に執着は無い。万金の財も、千古に輝く榮譽も私にとつては鉄鎖に等しい。私はたゞ全能者に魅入られて、宇宙逍遙の旅に生きてゐるのだ。停止して、千里を走り、踏んで万里を行く。

人に背むかれても、太陽は私に笑顔を惜まず、森の梢の若芽は、私に更生を囁く。溝側のみみずも私をさし招き、竈の上の小猫も私に自適世界の幸福を物語る。

鳴かず、飛ばず、枯薄の下にうづくまるうづらのように大きな声を出さないが、枯草の下にも、自ら開けた道がある。…

無執着、無凝結、淡々として流れ、躬如として留る。飛ぶ日を忘れたのではない。巢籠りする日の貴さを学んでゐるのである。

漂々乎として風は胸空を満ち、悠々として人の子は、雲烟の世界を呼吸する。<sup>(57)</sup>…

ここには上述で見たような、肩肘張って、眉間にしわ寄せ、まなじりを決して、アジア解放のために死を賭して戦うべしという気負った姿勢から一転して、悠然と「雲烟の世界」から俗界を見ている心境が語られる。対米英戦争の帰結がある程度予期していた賀川は、「鳴かず、飛ばず」大きな声を出さないが「飛ぶ日を忘れたのではない。巢籠りする日の貴さを学んで」戦争終結後の構想を練っていたのであろうか。はたまた、日々刻々と変化する戦争の帰趨に、はやる心を抑えながら、真の宗教生活に入らんとした自戒の詩であらうか。いずれにせよ、「武張る文章」の合間にこうしたそれとは対照的な「柔らかな文章」が見えるのである。

こうした「武張る文章」と「柔らかな文章」の交錯そのものが、戦時下賀川のいつわらざる心境の反映であった。戦争という厳しい事態を神の試練と受け止め、国家の罪を背負い、「頸はしすみ頭はうなだれ」ながらも自らを叱咤鼓舞してこれに応ずる姿勢と、それでもなお、否そうした事態だからこそ、注がれる「いと小さき者」へのまなざし、この両者が賀川の内面で交錯していたのであろう。いと小さき者への賀川の心情は、四三年一〇月一五日夜半に行われた富田象吉の告別式式辞においても吐露される。賀川は石井十次の後継者としての富田氏を称え次のように述べている。

……こうした世の中のいと小さき者に対しての愛がなくては駄目である……地上の悩みあるものを助けんとする者こそ天の使でなくてはならぬ。私はかうした天の使を知己朋友の一人として持ったことを私の生涯の栄光とするのである。……この天の使は貧民街に降りて来た、めに先ず赤ん坊を天にかへし更に最も大なる犠牲として大学を出たばかりの令息を失はれた。彼自身もまたメタンガスを吸ふて身を壊した。然し誰かは細民街に仕へなくてはならないのである。私は富田氏に於いてイエスを通して昇り降りする天の使いを見た。……いくら社会事業の組織

が立派になつたとしても、いと小さき者への愛がなくなつたら何にもならぬ。…富田氏の全生涯こそそのまゝ、天の使の記録である。…富田氏は人の欠点をあげないで、常に悩める者、老いたる者、戦いに疲れたるものゝために、天の使としての生涯を送られた。我々も又富田氏の志を継ぐものとなるのでなければ、この告別式は無用である。…天の父よ、彼が大阪の下層階級に奉仕し、恵まれない人々の友となりました如く、我々をして彼の純なる心を受け、新しい出発をなさしめたまへ。決戦下、前線の将士が祖国のために喜んで血を流す如く我等も十字架を負うて、巷に彷徨するいと小さきものゝために血を流したいと思ひます<sup>(8)</sup>

下層の、恵まれない、いと小さき者のために捧げた富田の生涯は、そのまま賀川の生涯でもあつた。どんなに社会保険が整備され、国の社会事業が完備されようと、「いと小さき者への愛がなくなつたら何にもなら」ない。このことが賀川が種々立ち上げた社会事業の原点であり、富田氏の告別式であらためて賀川が確認したものではなかつたか。そうした思いが、戦時下、国家や天皇のためではなく、あえて「巷に彷徨するいと小さきものゝために血を流したいと思ひます」という言葉となつたのであろう。

また、賀川は先述の「腰ひき繋げて丈夫の如くせよ」で愛国の至情あふれる思いを語つたが、この小論が掲載された『火の柱』第一六八号には、一方で「秋風を迎ふ」という散文詩が掲載された。八月に世話をしていた胸の悪い病人二人を亡くし、秋風がはいっていくような無力感を賀川は次のように語る。「生命だけは人間の力でどうにもならぬと知りながら『元氣づけてあげたい!』、『癒してあげたい!』と祈る心に励まされて偶々この小さい奉仕を友達らと続けて来ても、秋風が颯々と、それらの人々を奪ひ去ると、その後ろ姿を見送つて、ただ杳然とする外途は無い」。「人に見られるのでも無く、神に賞めて(ママ)貰ふ為でも無く、唯、本能的に、あの人達は気の毒だから、少しでも手伝をさせて貰ふと努力しても、天の思召が他方になれば、私等の努力は何の報れるところも無い」

と時に絶望的になりながらも、それでも「天と共に歩み、天と共に嘆く外道が無いのであらう」、従つて「私は倒れるまで前進するのだ」と自分を叱咤激励するのであった。

このように恵まれない人々に対する「小さい奉仕」は、太平洋戦争下においても嘗々と続けられた。神戸新川の貧民窟における救貧活動以来、神戸や大阪のイエス団によるセツルメント事業、東京における江東消費組合、中野組合病院、松沢幼稚園その他の保育事業等々、全国一七ヶ所の諸事業がこの戦時下においてもなお、継続されているのである。<sup>(9)</sup>そして、これらの諸事業がアメリカの賀川後援会による資金の途絶などにより経営困難に陥つたとき、イエスの友会を中心に四〇年一〇月、第一回賀川事業後援会が結成された。<sup>(10)</sup>以後、一年ごとに更新継続され、四四年の第四回まで続けられた。四三年九月一日の鳥取大震災における救援活動もまたその一環であつた。

さらに、四四年一月の「芽を吹く櫟」と題する散文詩がある。櫟は人間に何遍切られても、再生する。その櫟の独白、即ち「…俺は斧や、鋸を恐れては居ない！生命の跳躍は凡ての悪条件を克服して天に延び上る！俺に天が生命を貸してくれる間、俺は絶対に悲観しない！」、傍らで聞いていた賀川は「…櫟の力強い再生力を凝視して、自分の力なさをつくづくと反省した。…自然界にはこんなごやかな風景もあるに、何故、人間だけはあくせくしなければならぬのだらう」と感じる。さらに櫟の独白「…だが、俺はちつとも悲観しないよ。日が出て来なければ根を張るだけのことだ！俺は土の中にウンと根を張つてやるんだ！斧や鋸は、根つこを切り起すことは出来ないからな…俺は暴力と斧と、鋸を恐怖しない！俺は冬枯と積雲と枯嵐に戦慄しない。暗黒は俺の友人である、霜柱は私の仲間である、俺は天を楽しみ天に生きる工夫を知つてゐる。俺は天に生きる…天が俺に生命を借（ママ）してくれる間、俺は悲観することを知ら無い」。<sup>(11)</sup>この櫟の独白こそ当時の賀川の心境の独白ではなかったのか。一九四四年の年頭を飾るこの文章は、ますます、賀川が戦争に対する悲観的な見方を強めながらもなおかつ、「土の中にウンと根を張つて」ジツと耐え、来るべき時節に備える静かな決意を示すものと考えられる。

さらに、翌二月に発表された「無言賦」では、「手を縛られ足をく、られた雪舟」が涙で鼠をかいだ故事が引用される。それは伝道活動など日々の活動を封じられた賀川の姿でもあった。「無事なる時、無難なる時多難を知り、多事を予測し、悠々天と共に黙し、梢の如く、天に向つて呼吸することも神韻の福音である。…星は語らず花歌はず、だが光と色は声以上の声を持ち詩以上の歌となる。語らず云はずその響は天地に普ねし。葬らるゝことを人に委し、自らを葬ることを樂しめば天も莞爾として両腕を開く。歴史もかゝず日記もつけず、無限より無限に流れゆく絶対帰依の生活に天地悠久の関門は開かる」<sup>(8)</sup>。黙して語らず、永遠を信じ悠久に生きる絶対帰依の生活。これは先述の鶴見の指摘するように静かなる抵抗の詩でもあった。

このように死の覚悟、断固戦う姿勢を説いて戦争に強くコミットする「武張る文章」と、ふっと息をつくような「柔らかい文章」が交錯する様をみてきたが、後者にこそ、賀川の本領があったし、同時に前者もまた、伝道者賀川の本質の発露であつた。即ち、ここに引用した「武張る文章」の多くは、実は伝道者としての賀川によって、信者を想定した説教として語られたものであつた。説教は信仰を再確認していく作業であり、語られる場所や聴衆の反応によつて大きく左右される。「アジテーター」とも言うべき聴衆への強い働きかけは、戦時中のみのことではなく、かつての「神の国運動」にも見られる賀川独自のスタイルでもあつた。<sup>(9)</sup>敵国の宗教なるが故に官憲や右翼に妨害・迫害され、信仰に疑問を持ち、あるいは信仰を捨てんとする同胞の信者に対して、また、戦局が厳しさをますますつけて更なる苦難に追いつめられている多くの「いと小さき者」に対して、彼等を励まし、勇気づけ、神の救いに導こうとする姿勢は伝道者賀川の一貫した姿勢であつた。同時に、この「武張る文章」のなかに見られるアジアとの連携、米英の「独善主義」、帝国主義からのアジアの解放といった論理は、二〇・三〇年代の賀川の言説の論理のなかに胚胎する。既述の「死を説くイエス」も実は、子細に検討すれば、充実した「生」を担保するものとしての死を説くものであり、二〇、三〇年代の生命宗教を説いたその論理と裏表の関係にあつたと見るべきであろう。「生」



の充実はそのまま死を意義あるものとすることに直結する。

#### 四、「戦争支持」への「転回」の論理

賀川「転向」論によれば、賀川が二〇・三〇年代の平和主義を貫徹せずに、戦時下、「転向」したその理由は何かという問題設定になるが、私は、戦時下の「武張る文章」Ⅱ「戦争支持」が、二〇・三〇年代の賀川の言説と相矛盾するものではないことをすでに指摘した。言い換えれば、戦時下の「武張る文章」は賀川の「転向」を示すものではなく、矛盾の皮を剥いで残った賀川の本質にかかわる「ある認識」によるものであることを指摘したい。即ち「戦争支持」への「転回」の論理についてである。前掲『太平洋戦争と賀川豊彦』の著者河島は、その要因を三点指摘していたが、私は河島が触れなかった二つの要因を指摘したい。

その一つは国家に対する賀川の認識である。賀川にとって国家は、抽象的概念的なものではなく、具体的な日本国の山河であり、歴史であり伝統であった。<sup>(47)</sup>従って、国家は自明の前提であり、彼自身と分割できない一体のものと観念されていた。国家を批判すると言うより、「頸はしずみ頭はうなだれ」ようとも「イエスのように」<sup>(48)</sup>（日本）国の罪を背負<sup>(49)</sup>「わねばならないのであった。従って、国家との距離が保てず、国家を相対化できず、国家が間違ってもそれを批判することが出来なかった。こうした状況に立ち至ったとき、上述のような詩や散文詩の形を取って、その精神の苦渋が表出される。もとより賀川は、絶対的非戦論者ではない。戦争を如何にして回避することが出来るかについて、具体的・現実的に考察し実践してきた。その内容については第二章で述べたとおりである。さらに、対米開戦直前における近衛文麿のぎりぎりの日米交渉にも一役買った賀川であったが、戦争が勃発するや、「すでに始まった以上、国民の弱点を自分の弱点とし、個人として背負わねばならぬ責任を負って行かねばならぬと思つていた」<sup>(50)</sup>。

兵役拒否者イシガ・オサムは四三年一月、憲兵隊本部で、同じく取り調べ中の賀川に引き合わされ、賀川から説得的な言葉をかけられたという<sup>(74)</sup>。理想のために国法を破ることは聖書も禁じているとして、あくまで国法に従う賀川にとつて、兵役拒否はおよそ考えられない行為であつた。むしろそうした行為を卑怯であるという心性が賀川にはあつた。それは非戦論を説く一方で徴兵拒否を否定する内村鑑三の論理とは位相を異にするものであつたが、内村より二七歳若い賀川にとつても、近代日本国家を自ら背負うという当時の宗教者に共通の意識があつた。そうした国家認識は、現在の歴史学の国民国家論の視点から見れば、当然批判されるべき論点を持っていた。国家を相對化し、強大な国家に負けない、あるいは屹立する国家と対峙する自立した「個」の精神の確立が要請される所以である。

「戦争支持」への「転回」のもうひとつの要因は、賀川のアジア及び日本民族にかかわる認識である。賀川のみならずキリスト者にとつて、アジア・欧米を問わず、世界人類は兄弟であり同胞である。しかし、日本とアジア、特に中国や朝鮮半島との関係はこうしたキリスト教的な兄弟関係に留まらず、歴史的起源、すなわち人種起源にさかのぼつての兄弟であるという認識である。即ち、日本民族はアイヌ系、大陸系、南方系などの混合民族であるという認識である<sup>(75)</sup>。賀川によれば「我々日本人の七割までは朝鮮人種である。またフィリンピン人種（ママ）、支那人種など、いろいろなものが混つて特種（ママ）な日本人種を作つてゐる」という<sup>(76)</sup>。このような認識は、日本のアジア進出を合理化するとともに、アメリカの日本人移民排斥などにみられる人種差別を厳しく糾弾することになる<sup>(78)</sup>。先述の通り満州事変を批判した賀川が、その一方で、「無住地帯に漢民族との衝突を避け、蒙古人種である日本人が移住するのに何の遠慮があるか、祖先が出てきた地方にもう一度帰るだけのこと」と言つて、満州国建国を合理化するのである。そして、アジアで唯一の独立国日本が、欧米列強による侵略から、キリスト教的な教化という手段で中国を守り助けなければならないと考える。賀川にとつて、助けるべき、また協力すべき「日本と支那が戦争し

なければならぬ理由」は「どこにも発見できない」のである。むしろ「支那を援けよ、その時に支那は日本の味方となるであらう。民国を奉仕的に指導せよ、その時に黄色人種は一つにな<sup>⑧</sup>る、そして「日本民族の血のうちには、支那民族の血が何パーセントか有る。…その血の爲にも支那民族を愛する必要がある」と賀川は主張するのである。このようにアジアの連携、特に中国と日本の連携によつて、欧米の植民地支配からアジアを解放しようというのが賀川のものである。四三年一月六日に発表された「大東亜宣言」に対する賀川の高い評価はそのことと無関係ではない。賀川は言う。

「大東亜宣言は実に立派で、各民族各国民の特徴を生かして、大東亜を樹てんとしたところに永遠不滅の生命がある。…宇宙を救ふ所の神の化身がキリストである。…救ふのであるから、下目々に附いて、どんな小さい者、卑しい人々をも救はんとなすつたのがキリストである。…すべてを生かすすべてを昂揚せんとする日本の大東亜宣言に基き、国土防衛の此の時、二、三人の者でも集つては、真剣に祈り続けねばならぬ。…一人となつても国を守る精神を持たしめ給はん事を<sup>⑨</sup>」。大東亜宣言あるいは大東亜共栄圏の虚妄を知っている現在の我々から見れば、こうした賀川の言辞は、当時の軍部や政府のプロパガンダと全く変わらない。しかし、賀川を内在的に理解しようとするれば、当時の軍国主義者とは異なる「位相」をもつて語られたものであることが了解されよう。「どんな小さい者、卑しい人々をも救はん」とするキリストの精神を、アジアを救い、アジアに貢献しようとする日本の決意とみて、この「宣言」を称揚したのであらう。それに反して、米英はキリスト教の精神である「地位高きものが地位低きもの、爲に、社会的地位を投げ捨て、かゝる謙遜さ<sup>⑩</sup>」を忘れ、逆に「小さく」「弱い」アジアを抑圧しており、従つて「正義」（＝「キリストの精神」）は我にありという賀川流の論理が展開されるのである。

## 五、三〇年代の言説と戦後の言説を繋ぐもの

「転向」とされる戦時下（四〇年代）の「武張る文章」の論理も実は、三〇年代の平和論の論理のなかに胚胎することを見てきたが、ここでは、三〇年代の言説と戦後のそれとの関係について明らかにする。

敗戦後の賀川の活動は素早く、めざましかった。そこには敗戦によるショックで茫然自失した様は微塵もなかった。前述の四〇年代の「柔らかい文章」で指摘したような、まるで、この時を待っていたかのような活動振りであった。

戦後、賀川が、世界連邦運動をはじめとする世界平和運動を推進し、受賞しなかったものの、何度かノーベル平和賞候補に名が挙がったのは周知の通りである。<sup>(81)</sup> この世界連邦については、敗戦直後の四五年八月一九日、賀川はすでに松沢教会で「世界連邦制度の創造」と題して、「ポツダム宣言の受諾は世界連邦制度創造の助勢であると考へ、如何にすれば、世界に戦ひなく公正なる政治が行はれるかと云ふことを研究する必要がある」と語っていた。さらに戦後の日本が学ぶべき国家として、「宗教と文化と科学と経済とこの四つを完全に一つにし、協同組合制度を徹底させてゐる」スウェーデンを挙げている。

また、この説教からおおよそ一週間後の八月二八日、東久邇から「戦時中、国民の道義心が低下したから、キリスト教を通じて、道義心の向上に努力してもらいたい」と依頼された賀川が、東久邇内閣の参与として「一億総懺悔運動」を推進するのにもよく知られた事実である。こうした世界連邦や世界国家構想、また精神復興による道義国家日本の建設といった平和運動、さらにはスウェーデンを範とする「小国主義」は、実は今まで見てきた三〇年代の賀川の平和構想と同一のものである。

こうした世界連邦構想については、日本のファッショ化が一段と進み、欧米列強が排外的ナショナリズムへと傾いていた三五年当時、賀川はすでに「世界国家を作れ」と主張していたのである。曰く、

人類は間違ひぬいた末遂に大戦争を惹起した。何千億万円の浪費をした戦争によつて、何十年も続いたこの不景気、それ位日本及び世界の迷妄は深い。で、我々は如何にかして、世界の平和が続くやうに努力しなければならぬ。軍縮会議が成功し、協同組合貿易が出来、二百四十位の異つた言葉の人種が一つになり、世界平和を基礎とする世界国家を作ればよいと思ふ。思ひ思ひに国体は違つてゐるが、貨幣、貿易、警察を統一し、搾取、掠奪のない共済組合をつくることは、決して我々の夢ではないと思ふ。

父なる神様

：我々が改心し、世界の連邦組織を夢に描き、キリストが教へられた「御国を来たらせ給へ」といふ祈りが我々の間に徹底し、支那、ロシア、イギリス、アメリカ、ヨーロッパ諸国が互に愛し合ふキリストの精神を与へ給へ…

これは、戦後の賀川の世界連邦運動の理念と全く同一の趣旨であつた。

## 六、おわりに

賀川が書いたものは、『賀川豊彦全集』二四巻のほかに、既述の『雲の柱』（復刻版一九巻）や『火の柱』（同五巻）、さらに『神の国新聞』（同一〇巻）、戦後の『世界国家』（同五巻）等々に収録されたもの、そして未だ活字化されていないものを含め、その量は膨大なものになる。また、これらのなかには説教や講演など「語られた言葉」を「文章化」したのも多く含まれている。また、すでに述べてきたが、賀川「転向」説の根拠とされる「戦争支持」の文章は、特定の対象に向けて発せられた説教的なものととして読まれなければ、本質は明らかにならないであろう。

語られたものの「文章化」はもとより、賀川自らの筆による作品でさえ、全国を飛び回つて展開された諸々の社

会運動の合間を縫って(というより、そうした社会運動の運動資金を捻出するために)書かれたものであって、もとより推敲を重ね、彫琢をほどこした文章によるものではない。後世の我々の特権として、残されたこれら膨大な文章(語られたものを含む)を、時系列に並べ、その論理的矛盾を衝くことはやさしい。機関銃のように発せられた言葉の「大いなる矛盾」、そうした矛盾の皮をひとつひとつ剥いで、それでもなお残る「芯」あるいは「核」とは何か。それは、伝道者として「イエス流に生きる」ことであり、貧しい、いと小さき者に対する物心両面における具体的実践的な援助であったと言わなければならない。戦時下のさきの「柔らかな文章」は、まさにその「芯」の表出であった。そして、これと同じ時期に発せられた「武張る文章」でさえ、実はこうした賀川の「芯」から発せられたのであって、決して「転向」の根拠とされるようなものではないのである。さらに、「武張る文章」のなかに見られるアジアの連携、米英の「独断的正義」の押しつけ、帝国主義からのアジアの解放といった論理は、三〇年代の賀川の平和論の論理のなかに胚胎することとすでに指摘した通りである。

一方、三〇年代の賀川の国際協調主義、一連の平和構想と、世界連邦運動をはじめとする戦後の賀川の平和運動とは全く同一のものであり、三〇年代と戦後の賀川が、いささかも変わっていないということとすでに見てきたとおりである。このように見てくれば、賀川において、「権力によって強制されたためにおこる思想の変化」という意味での「転向」はなかったと言うべきであろう。拙稿において「転向」と言わずに、「戦争支持」への「転回」という言葉を使ってきた所以である。

戦間期、特に三〇年代のなかば以降、顕著となつたファッショ化・排外的ナショナリズムの潮流に抗して、二章三節で指摘したような協同組合を通じた国と国とのネットワークの構築に向けた賀川の運動から学ぶことは多い。それは「文明の衝突」ではなく、協同互恵の精神、権利及び機会の均等、搾取主義の排除といった三原則を掲げる協同組合主義による、世界の共通項や融和を見出す真の「グローバリゼーション」への道であった<sup>⑧</sup>。「世界を日本のた

めに」ではなく、「世界精神」に貢献する日本という、三〇年代の賀川の主張も、今日的文脈のなかでまた新たな意味を有するのである。

(1) 「雲の柱」第七号編集委員会「賀川評価の科学化をめざして」（『雲の柱』第七号、一九八八年、一〇二頁）。

(2) 例えば、藤野豊「近代日本のキリスト教と優生思想」（同著『日本ファシズムと優生思想』かもがわ出版、一九九八年所収）、倉橋克人「賀川豊彦」（土肥昭夫・田中真人編『近代天皇制とキリスト教』人文書院、一九九六年所収）、河島幸夫「賀川豊彦の生涯と思想」（中川書店、一九八八年）、同「賀川豊彦と太平洋戦争」（同、一九九一年）、佐治孝典「土着と挫折―近代日本キリスト教史の一断面」（新教出版社、一九九一年）などがある。

(3) 周知の如く、十五年戦争期においても、賀川は欧米をはじめ中国、オーストラリアなど、数多くの海外伝道、講演活動を行っている。こうした海外での賀川の発言内容は、当時最もとより現在においても必ずしも明らかにされていない。賀川豊彦記念松沢資料館の元研究員であった米沢和一郎氏の精力的な資料収集によって、海外における賀川の発言内容、現地の新聞・雑誌などのジャーナリズムや現地要人の賀川講演に対する反応及び評価などが明らかにされつつある。なお、氏は現在、エール大学嘱託研究員として、海外での賀川資料の収集を継続されており、その「賀川ファイル」は膨大な量にのぼる。筆者も二〇〇一年一月、明治学院大学校内で氏からその一部を見せていただいた。記して感謝したい。なお、欧米での賀川評価については、米沢和一郎「賀川豊彦の欧米での評価」コープこうべ・生協研究機構、賀川豊彦研究会、一九九五年を参照のこと。

(4) 「イエスの宗教とその真理」（『火の柱』一五二号、一九四二年四月十日）。

(5) 鶴沢裕子「賀川豊彦試論」（『近代日本キリスト者の信仰と論理』聖学院大学出版会、二〇〇〇年所収、一四八頁）。

(6) 御厨貴は『馬場恒吾の面目―危機の時代のリベラリスト』のなかで、従来馬場評価に対する批判として次のように語っている。

「絶対的基準をもって外在的に断罪すると、馬場には甚だ分がない。だが、こうした一刀両断型の見方では、危機の時代を生き抜いた人物はむろんのこと、危機の時代そのものを内在的に理解できないのではないか。」（同書、中央公論社、一九九七年、八頁）。

(7) 布川弘は一九三〇年代の賀川の平和運動をクリスチャン・コーポラティブ・インターナショナル運動と位置づけ、従来あまり顧みられなかったこの国際的な平和運動の意義を明らかにしている（同著『一九三〇年代における賀川豊彦の平和運動』『日本史研究』四二四号、一九九七年一二月）。

- (8) 「宗教と世界平和」(『雲の柱』三五年一月号)。
- (9) 横山春一「賀川豊彦伝」新約書房、一九五〇年、三一五～三一六頁。初出は『雲の柱』一九三一年二月号。
- (10) 本田清一「街頭の聖者 高橋元一郎」関谷書店、一九三六年、二一六～二二九頁。  
 なお、賀川は病氣の高橋を自宅で静養させたが、三九歳という若さで病没した。高橋の最期を賀川はみとり「君の生活は全く詩そのものだつたね。君は彗星の尾のやうに天空を掠めて、星を抱擁する詩人だ。君は生活の詩人だ。詩を生活する人だ。僕は君を通して多くのことを教へられた。有難う、有難う。きつと天国で平和運動を続けてくれ給へ」と語った(同書、二七八頁)。
- (11) 「勝利の悲哀」(『雲の柱』三二年一〇月号)。
- (12) 一九二二年一月、蘆花が神戸に賀川を訪ねたのが両者の最初の出会いであつた。関東大震災後、賀川が松沢に居を構えてからは近所になり、賀川はしばしば蘆花を訪問した。二四年一月一日、蘆花は「宗教運動の一切は賀川豊彦に寄託し、自らは唯懺悔僧低頭的生活に入ることを決心した」という(野口存彌「沖野岩三郎」踏青社、一九八九年、三一八頁)。また、五七歳になった蘆花が、精神的自由を得るのに力を与えてくれた感謝すべき三人として、妻と「漂々しい信仰で遠ながら私に(ママ)力づけて下さつた内村鑑三先生。徹底した無抵抗で私を安心さしてくる賀川豊彦後生」を挙げている(同著「太平洋を中にして」文化生活研究会、一九二四年、七五頁)。なお、この一文を引用して内村は日記に「之は余が此世で受けた最大の名誉である」と記している(『内村鑑三全集』34、岩波書店、一九八三年、三二七頁)。
- (13) 前掲「賀川豊彦の欧米での評価」一二頁。
- (14) 米沢和一郎「暗い時代の真実の叫び——平和主義者賀川豊彦の言動——」(以後「暗い時代の真実の叫び」と略称する。『火の柱』第一五三六号、一九九四年七月)。
- (15) 更井良夫「神よ彼等を救し給え」(『クリスチャン・グラフ』No. 384、一九七八年七月、六～七頁)。なお、『神の国新聞』第七九六号、三四年四月では「賀川氏はその時、キリストの十字架のあがなひとゆるし、救ひを説いた」と記されている。
- (16) "A Letter from Shanghai" Reconciliation V.12, No6 June 1934. 前掲「暗い時代の真実の叫び」より重引。
- (17) 村島婦之「指導者の涙 賀川豊彦氏の詩『涙に告ぐ』」(読書展望)一九四七年一月号、二八～二九頁)。なお、この詩は前掲『賀川豊彦伝』にも引用されているが、「十字架にかかったイエスのように」が「十字架にかかったイエスの弟子の私は」となるなど若干違っている。



(18) 前掲「暗い時代の真実の叫び」。

(19) 「武蔵野の森より」(『雲の柱』三十七年一月号)。

(20) 盧溝橋事件及びその後の政府や軍部の対応について、直接言及したものはないが、暗にそれを批判したものは散見される。例えば「日本と世界歴史」と題する小論で、「日本だけが、世界歴史から駆け離れて存在出来ると思ふ人があれば、それは大きな間違ひだ。…日本だけが、地球から飛出してゐるやうな謬見を私は取らない、道徳を離れて、日本は存在し得ない。日本は世界の道徳に貢献しなくなつた日に、世界歴史に記述されなくなるであらう。反省する必要がある」(『雲の柱』三十七年一〇月号)。

(21) 「雲の柱」三十八年二月号。

(22) 三〇年代以前の平和論については、前掲「賀川豊彦の生涯と思想」をはじめ、賀川評伝の多くが取りあげている。一九一七年、友愛会神戸連合会評議員となつたのを契機に、関西における労働運動の中核的存在となつた賀川は、労働者の人格権、生存権を強く主張する一方、それらの前提とも言ふべき平和の問題についても論陣を張つた。よく引用されるのが、『中外日報』に一九年七月八日と一一日に掲載された「平和の道」と題する一文である。

「日本に三つの虚偽がある、否、四つの虚偽がある。軍国主義で無ければならぬと云う虚偽と、日本歴史の爲なら、嘘を書いても、教へても、綴つてもかまわぬと云う虚偽と、この三つの虚偽を持ち支へて行く爲に、現状維持の資本主義が、最後の世界の様に考へて居る。安価な文化主義―その四つの虚偽がある。

世界は、皆万歳と云ふ。…然し日本は万歳と云ひ得ない、一つの虚偽がある。それは彼が、真正に平和を愛して居らぬからである。

三つの戦争が、三つの勝利を教へ、三つの虚偽と三つの自負と、三つの辨に導いた。今、日本は平和など愛してやしない。日本には、今平和は無い。支那…？シベリア…？…？日本の外交で、その政治は憲兵政治では無いか？

私は、大きくなる爲に、泥棒する国家を恥ぢる。個人だけは正直の道徳があつて、国家には、侵略と、掠奪の道徳の外には、何も無い。その無道徳、無理想、無節操の国家を恥ぢる。私の恥ぢるのは、たゞ日本計りでは無い。私は、英国と、仏国と、伊国と、そして、米国をも同様に恥ぢる。ほんとうに、利権のみしか思は無い近世式国家組織を私は、全く恥ぢる。…(中略)…平和の道は、虚偽の道では無い。平和の道は真理と、真理を熱愛する高路にある。我等に真正であらしてくれ、それでなければ、私等は平和で居られない。百万の軍隊で守る平和に何の平和があるか？

刀で捷ち得た、平和が何の平和だ、軍隊から解放してくれ、その時に真の平和があるのだ。

刀と、秘密外交と、軍艦と、領土欲と、虚偽の歴史から、解放せられよ日本人、いつまでおまへは軍刀を礼拝する積りだ！」(『賀川豊彦全集』、第一〇巻、二二―二三頁)。なお、この小論が収録された単行本『労働者崇拜論』は発売直後、発売処分となった。

また、一九二二年には尾崎行雄を中心とする軍備縮小同志会主催の講演会で軍備撤廃論を主張した。なお、後の満州事変の伏線となる田中義一内閣による山東出兵に危機感をもった賀川は、キリスト者や社会主義者と共に、二八年一〇月「全国非戦同盟」を結成した。二、我等は戦争及び戦争準備の行動に反対す、一、我等は侵略主義に基く政治的、経済的、教育的運動に反対す、三、我等は略奪を鼓吹し、弱小民族或は虚弱団体に対する軍国的言論と圧迫とに反対す」という三つの綱領、二、非戦論の宣伝、一、不戦条約の徹底……など一〇の主張が掲げられた。なお、顧問には安部磯雄、高野岩三郎、吉野作造が名を連ねた(内務省警保局編『社会運動の状況』昭和三年版、二一八―二二頁)。

(23) 「世界平和の経済的工作」(『雲の柱』三五年一〇月号)。

(24) 村山盛嗣「賀川豊彦」関田寛雄ほか編『キリストの証人たち―地の塩として』第三巻、日本基督教団出版局、一九七五年、一〇五頁。

(25) 米沢和一郎「魂の外交―賀川豊彦宗教使節の軌跡―」(以後「魂の外交」と略称する。『賀川豊彦研究』第四〇号、二〇〇〇年、五頁)。

(26) 「宗教生活と世界平和」(『雲の柱』三四年一二月号)。

(27) 「軍縮と世界平和」(『雲の柱』三四年八月号)。

(28) 「予言者ハガイの信仰日誌」(『雲の柱』三四年一二月号)。

(29) 「軍縮会議と平和教育」(『雲の柱』三四年一〇月号)。

(30) 「世界平和と教育様式の改革」(『雲の柱』三七年八月号)。

(31) 「二等国主義」(『雲の柱』三四年九月号)。

(32) 「世界精神に生きよ」(『雲の柱』三五年九月号)。

(33) 「宇宙精神と日本精神」(『雲の柱』三六年一二月号)。

(34) 「修養 腹の決め方」(『雲の柱』三七年三月号)。

- (35) 内村鑑三「世界と日本」（英文）一九二六年『内村鑑三選集4』岩波書店、一九九〇年所収、三〇五頁。
- (36) 内村と賀川の初会是一九二四年六月五日。賀川の日記では「先達つて内村鑑三先生と初めて一緒に銀座の警醒社で悠然お話する機会が与へられました。先生は『わたしの宅に来る青年達は少し聖書を研究し始めるとすぐ聖書道楽になつていかぬ。聖書を実行せねばいかぬ。少し実行する方法をうちの青年に教へてやつて下さい』と云はれ、『講壇を交換しよう』とまで云はれました。…」（バラックより）『雲の柱』二四年六月号。一方、内村の日記では、対米問題について小崎弘道と会うべく警醒社へ行き、そこで「賀川豊彦君と会談することが出来、是れ亦非常に愉快であつた」とある（前掲『内村鑑三全集』34、三一六頁）。
- (37) 「PEACE IN THE PACIFIC」(An address given under the auspices of the League of Nations Union, Melbourne, April 29, 1935)
- (38) 拙稿「賀川豊彦思想の現代性」（歴史と神戸）第三九巻、第一号、二〇〇〇年所収、六頁。
- (39) 「世界平和の経済的工作」（『雲の柱』三五年一〇月号）。
- (40) 「組合国家を論じ国家改造に及ぶ（下）」（『雲の柱』三四年九月号）。
- (41) 前掲「魂の外交」。なお、賀川と新渡戸稲造との関係については、別稿で論じる予定である。
- (42) 隅谷三喜男「まえがき」（賀川豊彦記念講座委員会編『賀川豊彦から見た現代』教文館、一九九九年所収、六頁）。
- (43) こうした賀川流のモラルエコノミーの今日的意義については、九八年「経済に倫理」をと提唱してノーベル経済学賞を受賞したアマーチア・センと関連づけて論じたことがある（前掲「賀川豊彦思想の現代性」四〇五頁）。
- (44) 鶴見俊輔他『日本の百年 2 廃墟の中から』筑摩書房、一九六一年、一五九頁。
- (45) 前掲「土着と挫折―近代日本キリスト教史の一断面」七四頁。
- (46) 賀川豊彦記念松沢資料館所蔵、「国際戦争反対者同盟会長ジョージ・ランズベリー閣下」宛の賀川の手紙。なお、安藤肇「深き淵より」はこれをもとにしているが、一部に誤字、脱字が見られる。また句読点も若干変更されている。例えばA B C D包囲圏の圏が脱落しているなど。なお、前掲「賀川豊彦伝」の著者横山春一は、当時、賀川からこの手紙の写しを受け取ったが、『賀川豊彦伝』執筆当時は「まだまだマッカーサー司令部の威力がつよく、うかつなことは一行も書けなかった」ので、この件については、伝記に加えなかったと言う（武藤武男編『百三人の賀川伝』下巻、キリスト新聞社、一九六〇年、六六頁）。
- (47) 米沢和一郎「戦時下、賀川豊彦の平和運動」（兵庫県部落問題研究所『月刊部落問題』第二六三号、一九九八年、四四〇四八頁）。

- (48) 横山春一「わが兄弟、わが骨肉のためならんには」(前掲「百三人の賀川伝」下巻、六八頁)。
- (49) 「苦難突破の精神的態度」(『火の柱』一五二号、四二年四月一〇日)。
- (50) わずかに、前掲倉橋克人「賀川豊彦」が、「火の柱」や「神の国新聞」を使って、戦時下、賀川の戦争への傾斜、その天皇観、優生思想について論じているのみである(同書、三四一〜三四八頁)。
- (51) 「キリストと死の芸術」(『火の柱』一五一号、四二年二月一〇日)。その他にも「死を説くイエス」に仮託して、死の意義を強調する記述は数多く見られる。「人間は死といふことを最初から人生のプログラムに入れて置かなくてはいけない……どうせ死ぬべき生である、果たしてさうならば、死といふ事実を最初から人間として生ける計算のうちにに入れて置かなければならない。そしていよいよ死ぬときには欣然として死ぬ、綺麗に死ぬ、芸術的に死ぬのである。……死から遁れようとしてはいけない、死もまた原理であるこれを最初から生のプログラムに入れて置くべきである。さうすれば従容として死を受け入れることが出来る。……楠公の死を讀美する日本人は芸術的の死を好む人間である」(『苦難突破の精神的態度』「火の柱」一五二号、四二年四月一〇日)。
- (52) 「基督の剛健なる精神」(『火の柱』一六〇号、四三年一月一〇日)。その他、戦うイエスについては、「鞭を持つ基督」と題して、「若し基督が今日、アジアに生れてゐたなら、彼は再び鞭を取つて彼等をアジアより追ひ払ふだらう。……我々も、又正義の為に或種の暴力を持つて搾取にあくなき米英を大東亜より駆逐せねばならない」(『火の柱』一七二号、四三年二月一〇日)。
- (53) 「賀川豊彦全集」第二〇巻、一二九頁、なお初出は「火の柱」一六一号、四三年二月一〇日で、字句は若干違っているが、ここでは全集に拠った。
- (54) 「腰ひき繁けて丈夫の如くせよ」(『火の柱』一六八号、四三年九月一〇日)。
- (55) 前掲倉橋「賀川豊彦」三四三頁。
- (56) 「基督教新聞」四四年一〇月四日号(『賀川豊彦全集』第二四巻、四二二〜四一三頁)。
- (57) 「無執着」(『火の柱』第一六二号、四三年三月一〇日)。
- (58) 吉田源治郎「マタイ伝の匂ひ富田象吉氏の生涯を偲ぶ(賀川先生の告別式式辞)」(『火の柱』一七一号、四三年二月一〇日)。
- (59) 二〇年ちかく前になる一九二五年の講演で、賀川は次のように語っている。「我々は、進んでいと平凡なる人たちへの奉仕をいそしむ者とならなくてはならぬ。それは、何と云ふ平凡な運動であらうーそれは時よりも全く衣食住の問題に没頭することである。即ち、飢ゑし時、食はせ、渴きし時、飲ませ、旅せし時、宿らせ、裸なりし時、着せ、病みまた獄にある時、見舞ふことに力を尽

すことである。或人は、云ふであらふ。『衣食住のことを心配するのは、宗教の係はる所ではない。それは最も非宗教的なことではないか』と。然し、私は繰返して云ふ―欠乏してゐるもの、ために、少しでも努力しようとする其行動それ自身が宗教の奥義である』と（『賀川豊彦全集』第一〇巻、一八四―一八五頁）。

(60) 村島婦之「賀川豊彦氏の社会事業と其特異性」（『雲の柱』一九四〇年六月号、二六―三〇頁）。

(61) 『火の柱』第一五九号、一九四二年一月一〇日。

(62) 「芽を吹く櫟」（『火の柱』一七二号、四四年一月一〇日）。

(63) 「無言賦」（『火の柱』一七三号、四四年二月一〇日）。横山春一によれば、この「無言賦」は四三年一月三日から九日間、東京憲兵隊本部に呼び出され、尋問された際に、「憲兵隊本部のかたい椅子にもたれて、塵紙にペンで書いたもの」だという（前掲「賀川豊彦伝」四〇五―四〇六頁）。

(64) 一九一八年、徳島中学三年の中野好夫は、賀川の帰郷を兼ねた徳島伝道説教を聞きにいった。「賀川のそれは説教というよりむしろ大演説、猛烈なアジという概すらあつた。だが、わたしは感激で毎晩会場を追つて回つた。やはり忘れがたい感銘の一つ」と回想している（同著「主人公のいない自伝」『朝日新聞』一九八二年八月二二日）。

(65) 太田雄三は「平和主義者としての賀川豊彦」のなかで、戦時中のナショナリスティックな発言は、賀川の幼年期の体験に根ざす「愛と承認を求める強い願望」によるもので、「個人的欲求を満足させるための無意識的な方策にすぎず、別に深い信念に支えられていたわけではない」と言っている。そして「平和主義者としての賀川の最もつりあいの取れた評価は、彼には確かに平和主義的な傾向があつたが、彼の平和主義は首尾一貫性においても、堅固さにおいても欠けるところがあつた」と結論づけている（同書「内村鑑三」研究社出版、一九七七年所収、三六一―三六九頁）。

(66) 河島はその一つに、「賀川の精神構造の奥底に定着していた《天皇への崇敬》を挙げているが、賀川の上皇観は、筆者の指摘した国家に対する賀川の認識と密接にかかわっている（前掲『太平洋戦争と賀川豊彦』二五―二九頁）。

(67) 一九三三年九月一日の関東大地震による日本の惨状に対して、賀川はなぜ神はかくも過酷な試練を「我等の最も愛する恋人」である「日本」に課すのかと、救護テントのなかで絶望的に歌っている（『お、我等は狂ふ』『雲の柱』一三年十一月号）。また、震災の一年後、復旧はしたが魂の復興がなされていない現状をまえに、「日本が更に、神にまで延び上がる為に、魂の復興を急げ!」と書いた（『闇も日本に退屈を感じてゐるではないか』『雲の柱』二四年一〇月号）。ストロンクナショナリスト賀川にと

つて、禁酒、娼娼運動はもとより、労働者・小作人の解放運動から平和運動にいたるすべての社会運動は、日本を「聖浄の輝く」国にするためのものではなかったか。

(68) 脚注(17)に同じ。

(69) 黒川徳男「日米交渉と賀川豊彦」(安岡昭男編『近代日本の形成と展開』巖南堂書店、一九九八年所収)。

(70) 『新生活の道標』(賀川豊彦『全集』第二三巻、三九頁)。

(71) イシガ・オサム『神の平和―兵役拒否をこえて』新教出版社、一九七一年、一八八頁。

(72) 『武蔵野の森より』(『雲の柱』四〇年一〇月号)。

(73) 例えば、歴史学研究会編『国民国家を問う』青木書店、一九九四年など。

(74) 「今度の朝鮮旅行で蒙古種の日本列島に渡来した系統が精明瞭に分かったことは私にとつて大きな利益であつた。面白い事は新羅が島根、鳥取方面に移民してゐると見え、新羅慶州方面の顔が島根県、鳥取県に見受けられるのは面白いと思つた」(『武蔵野の森より』『雲の柱』四〇年一月号)。

(75) 前掲『宗教と世界平和』。

(76) 小蕉英二「『国民』化という支配―多民族帝国としての『日本国民』概念―」(『歴史学研究』六八九号、一九九六年一〇月、一〇三―一〇五頁)。

(77) 「満州基督教開拓村に勇敢に参加せよ」(『神の国新聞』第一〇八九号、四〇年七月一〇日)。

(78) 「支那民族を愛せよ」(『雲の柱』三五年一二月号)。

(79) 「キリストを発見する」(『火の柱』一七三号、四四年二月一〇日)。

(80) 「謙遜の宗教」(『火の柱』一七二号、四四年一月一〇日)。

(81) 一九四八年八月六日、賀川も参加して世界連邦建設同盟が結成された。五〇年、賀川は英国を訪れ、世界連邦建設世界運動会長ロイド・オアその他の指導者たちと会見、五二年、広島で開かれた第一回世界連邦アジア会議の議長を務めた(同会の第三回会議まで議長を務めた)。五四年、世界連邦世界運動副会長、五八年、世界平和のためのキリスト者国際会議議長、五九年二月、世界連邦建設同盟総会が賀川をノーベル平和賞候補として推薦を決議、同七月、米国教会で賀川の同賞候補推薦運動が起こった。

(82) 「世界連邦制度の創造」(『火の柱』第四号、四五年九月)。

(83) 東久邇稔彦『東久邇日記』徳間書店、一九六八年、二三四頁。なお、『火の柱』四号では、賀川が東久邇に呼ばれたのは八月二六日となっている。

(84) 前掲『宗教と世界平和』（『雲の柱』三五年一月号）。これよりさらに一〇年前の一九二五年、賀川はすでに世界国家という語を用いていた。「二十世紀が理想と光明に輝く世界国家を造らうと云ふのに、何が怖いかそれに加はらうとせぬ」（武藤富男「解説」『賀川豊彦全集』第一〇巻、四七二頁）。

(85) 鶴見俊輔「序言 転向の共同研究について」（『思想の科学研究会論』共同研究 転向 改訂増補 上『平凡社、一九七八年所収、六頁）。

(86) 人江昭「新世紀を語る」（『朝日新聞』二〇〇〇年一月二五日）。

（追記）文中の「支那」の用語は、当時の賀川自身の使った言葉としてそのまま引用した。

本研究は、平成一二年度北陸大学特別研究助成金の交付を得て行われた。